東国の仏教

由木義文

1

初期日本天台をみてくると興味深い事実に出会う。それは、最澄滅後、日本天台は東国出身の僧を中心に、多く展開していくという事実である。初代座主・義真（七八一―八三三）、二代座主・円澄（七七二―八三七）、三代座主・円仁（七九四―八六四）、四代座主・安慧（七九四―八六八）、七代座主・猷憲（八二七―八九四）、そして徳円（生没不明）などはすべて東国出身、あるいは東国と深く係わつていた人々である。

〔出身地〕

義真　相模出身
円澄　武州（武蔵）埼玉郡出身
円仁　下野都賀郡出身
安慧　下野出身
猷憲　下野塩谷郡出身
徳円　下総国猿島郡出身

さらに興味深いことに、これら東国出身の僧は、義真を除いて、日本天台の密教化のプロセスをになつたということである。

このようにみてくると、東国出身の僧、ひいては東国の地と、日本天台の密教化とは深い係わりがあるのではないかと考えざるを得ないのである。つまり、日本天台の密教化の要因として、最澄と空海との関係や京における政治的・社会的な事情をあげることができるが、その外に東国の宗教事情をあげざるを得ないということである。

2

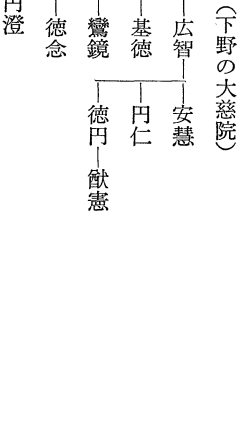
日本天台の密教化をになつた東国の出身者を比叡山に送り出したのは、道忠をその中心とする、いわゆる道忠教団といわれるものであつたことは、広く知られる。道忠について『叡山大師伝』は、

又有二東国化主道忠禅師者一。此大唐鑒真和上持戒第一弟子也。(1)

と記している。この文より道忠が「東国の化主」と呼ばれ、大きな力を東国に有していたことが知られる。また、

爰上野国浄土院一乗仏子教興。道応。真静下野国大慈院一乗仏子広智。基徳。鸞鏡。徳念等。本是故道忠禅師弟子也。[3]

と記されており、道忠が多くの弟子をもっていたことが知られる。以上の事実に、広智が徳円に「三部三昧耶」を付し、[3]「印信」を与えていることや、猷憲が徳円の弟子であること[4]を考えれば次のごとき、道忠門下の図[5]ができよう。



さて、この図をみてもわかるように、道忠教団といわれるものは、多くの人材を日本天台に送っていることが知られる。それ故、当然、日本天台が密教化していく、一要因を、東国にあったこの道忠教団に求めることができるのではなかろうか。

事実、道忠の師、鑑真には密教思想があったことが指摘される。凝然は『三国仏法伝通縁起』の中で、鑑真には『四分律』の思想のみならず、天台思想もあったと指摘しているが、この鑑真の招来目録や、唐招提寺をみる限り、密教思想があったと指摘することができるのである。

一つは、第二回の渡航における招来目録に「画の五頂像一鋪」[6]があったことである。二つは招来品の中に「功徳繡の普集変一鋪」[7]があったことである。三つには唐招提寺の講堂に不安羂索観音像、衆宝王菩薩像と獅子吼菩薩像があることである。一つめの五頂像とは五仏頂像と、二つめの普集変とは、普集マンダラと、みることができ、両者とも密教に係わっている。三つめの不空羂索観音像も『不空羂索陀羅尼自在王呪経』などに依っており密教に係わっている。このようにみてくると、鑑真の中に密教思想があったとみることができる。そして、このことは、その弟子・道忠、ひいてはその教団にも、密教思想があったとみることができよう。

しかし、道忠教団では、鑑真、あるいは、道忠が密教をもたらした以上に、盛んに行なわれていたふしがみられる。

一つは円澄が、最澄が唐より帰る前、延暦二十四年（八〇五）春、紫宸殿で「五仏頂法」を修しているからである。[8]二つは明らかに空海より、思想的に未熟であると考えられる伝法灌頂を、弘仁八年（八一七）、上野・下野の両国で各々十人

を選んで、最澄が修しているからである。[9] 三つは空海が道忠の弟子の広智に新密教経論の書写の依頼をしているからである。[10] 四つは道忠門下の教興による『金剛頂瑜伽経』三巻の書写が残っているからである。[11] 一つめは、最澄が密教を伝える以前から、円澄がよく密教を知り、修していたことを、二つめは思想的に未熟な伝法灌頂を東国の人々の求めにより授けたことを、三つめは広智門下で密教が修されていたことを、四つめは道忠門下に『金剛頂経』などへの関心があったことを、各々示していよう。すなわち、これらのことは、道忠教団の中で、盛んに密教が学ばれ、修されていたことを推測させるのである。そして、正に、鑑真、道忠に比較して密教が盛んに修されていたところに、東国の仏教の特徴を指摘することができるのである。

3

密教が東国で盛んに行なわれていたとすれば、道忠教団以外の東国の仏教者の中にも、その特徴をみられることができるはずである。その一人として、勝道をあげることができる。この勝道なる人物は、日光を開いた人物として、東国のみならず、京においても知られていた。というのは、空海が勝道について『性霊集』の中に記しているからである。

さて、勝道は度々、日光の補陀洛山に登ることを試みている。そして、その誓いの中に彼の信仰のあり方をみることができる。

堅発誓日。若使神明有知。願察我心。我所図写。経及像等。当至山頂。為神供養。以崇神威。饒群生福。[12] …

ここには、勝道が自からが図写した経典や像を山頂にもたらし、神を供養することにより、群生の福を饒（ゆたか）にしようとする態度がみられる。また、ここで留意する必要のあることは、神仏習合の考え方がみられるということである。というのは、補陀洛山とは、観音の世界であるからである。いずれにしても、大変な難行苦行を通して、「饒群生福」を実現する考え方をみることができる。そして、この難行苦行には、また呪法的な傾向があるようにも思われるのである。つまり、密教的というには、問題があるかもしれないが、そんな傾向をみることができるのである。

しかしながら、勝道は大同二年（八〇七）に補陀洛山で祈禱をしている。このことについて、『性霊集』は、

去大同二年。国有陽九。州司令法師祈雨。師則上補陀洛山祈禱。応時甘雨霧霈。百穀豊登。[13]

と記している。ここには、ひでりが続くので下野の役人が、大雨の降る祈禱をしてほしいと申し出たのに対し、祈禱し、雨を降らせたということが記されている。補陀洛山上で、雨を降らせる祈禱をしたということから考え、明らかに観音信仰に属する呪法、すなわち、密教的な法を修したとみること

ができるのである。

このようにみてくると、もちろん、勝道には高度の仏教哲学があつたと推測されるが、やはり、密教的要素が多くあつたとみることができるのである。それは、また、東国的ということにもつながつてくるものともいえるのではなかろうか。

一方、京から東国にやつて来た、徳一にも東国の仏教的影響を考えざるを得ないのである。徳一は法相唯識の人で、密教的影響など彼の著作には殆どみることができない。ところが、徳一の行動や持ち物などを通してみていくと、どうしても密教の影響があつたと考えざるを得ない面が出てくるのである。

一つは、いわゆるカガイ（嬉歌）との結びつきにより成立している山、筑波山に寺を建立しているからである。[14] 二つは密教の法具の白銅製の三鈷杵を徳一が持つていたらしいということからである。[15] 三つは『真言宗未決文』にみられる徳一の密教の知識からである。一つめには応々に密教思想と結びつきやすい山岳信仰を、二つめには密教の法を修していた可能性を、三つめには徳一の真言密教への並外れた知識を、各々、知ることができるのである。これらの事実よりして、何らかの形で、徳一が密教を修していた可能性を考えさせるのである。そして、また、密教的なものがあつたからこそ、「徳一菩薩」[16] と呼ばれ、東国で大きな力をもつことができたと考えられるのである。つまり、東国の仏教の特徴である密教的要素の受け入れを否定しなかつたからこそ、徳一の思想は東国に根づいたとみることができるのではなかろうか。

4

勝道などにみられる密教的な思想は、だれにより、東国にもたらされたのだろうか。それは、東国、特に関東地方に、白鳳、奈良、平安といつた時代に、国分寺や下野の薬師寺以外に、約百五十近くの寺を建立した人々と考えることができる。そして、それらの人々の多くは、多分、朝鮮半島からの帰化人たちではなかつたかとみることができる。『日本書紀』や『続日本紀』をみると、多くの朝鮮の人々が東国に定着していることをみることができる。例えば、

天智五年（六六六）冬、百済の男女二千余人を東国に置いた。（『紀』）

霊亀二年（七一六）五月、駿河、甲斐、相模、上総、下総、常陸、下野の七国の高麗の人千七百九十九人を、武蔵国に移し、高麗郡を置いた。（『続紀』）

天平宝字二年（七五八）八月、帰化した新羅僧三十二人、尼二人、男十九人、女二十一人を武蔵国の閑地に移し、始めて新羅郡を置いた。（『続紀』）

というようなものをあげることができる。いずれにしても、

天智五年（六六六）より、多くの朝鮮の人々が、東国に定着し、その政治経済、文化などに幅広い影響を与えたことが考えられるのである。

当然のこととして、宗教的なものも、これらの帰化人たちにより、東国にもたらされたはずである。当時の朝鮮半島で、盛んに活躍していたのは、慈蔵、宝月、元暁、義湘であるので、それらの人々の思想も東国にもたらされたとみることができる。

さて、慈蔵といえば、戒律の思想、華厳思想、それに護国の思想をみることができる。宝月においても、毘盧遮那仏を中心とする『華厳経』の思想をみることができる。また、元暁、義湘は、朝鮮華厳の中心的人物であり、彼らにはユニークな華厳思想をみることができるのである。

一方、朝鮮には、「仏法を崇信し、福を求めよ」[17]とか、願文を誦し、香をたいたりして王女の病気をなおす[18]などの除災招福の仏教もみられる。そして、これらには、応々にしていわゆる密教的といわれる面をもつているわけである。

このようにみてみると、当時の朝鮮の仏教の特徴とは、毘盧遮那仏を中心とする華厳思想が大変盛んであつたこと、さらに、除災招福をもたらす呪術的あるいは宗教的なものも行なわれていたとみることができるのである。つまり、色も形もない仏、毘盧遮那仏を中心とする、抽象的な仏教と、現世の利益をもたらす具体的な仏教があつたとみることができるのである。

さて、このような特徴をもつ、朝鮮の仏教が東国にもたらされると、如何に展開していくのであろうか。知られている資料・文献をみていくと、観音、薬師の信仰が殆んどであることが知られる。

〔観音の信仰〕

①『日本霊異記』の「観音の木像の助を被りて、王難を脱るるの縁」に観音信仰をみることができる。

②『常陸国風土記』の「多珂郡」の中に、大海の辺の石壁に、観世音菩薩の像が造くられたことが記されている。

③『栃木県史』によると、那須郡烏山町白久の寺院跡より、白鳳期の聖観世音菩薩像が発見されている。

〔薬師の信仰〕

①下野の薬師寺の存在

②『栃木県史』によれば、那須町東岩崎の堂平仏堂跡より、百済様式の薬師仏が発見されている。

さらに、興味深いことは、久野健「関東古代彫刻史論」[19]の中より、藤原前期までの残されている関東地方の仏像をみてみると、十二の仏像の中、三分の一が観音、三分の一が薬師、六分の一が密教系の像であるということである。

このようにみてくると、朝鮮の仏教が東国にもたらされる

と、色も形もない毘盧遮那仏、つまり、抽象的な仏は前面にあらわれず、具体的な現世の利益をもたらす観音、薬師といつた仏・菩薩の信仰が現われてくるということである。つまり、呪法と結びつく密教的なものが現われてくるということである。そして、このような傾向が誕生してくるのは、東国の地が未開の地で、切実に除災招福を必要としたからである。別の言い方をすれば、東国の風土の中に、呪法に結びつく密教的な要素があつたといえるのではなかろうか。そのために、抽象的な色も形もない毘盧遮那仏は東国では前面にあらわれてこなかつたのではなかろうか。

1　『叡山大師伝』・伝教大師全集・第五・附録・七
2　同　・伝教大師全集・第五・附録・三一
3　『天台霞標』二編巻之四・大日本仏教全集・第四十一巻・天台部五・二八五・A
4　『天台座主記』に「徳円弟子」とある。
5　道忠門下の図は、田村晃祐編『最澄辞典』一八五頁にくわしく記されている。
6　『唐大和上東征伝』・石田瑞磨『鑑真』（大蔵選書10）二九〇頁。
7　同・三一三頁。
8　『伝述一心戒文』・伝教大師全集・第一・六三八。『天台霞標』二編巻之二・大日本仏教全書・第四十一巻・天台部五・二五七・B
9　『慈覚大師伝』・続群書類従巻第二百二・六八四・下
10　『高野雑筆集』・弘法大師著作全集・第三巻・四七二～四七三
11　田中塊堂『日本写経綜鑒』（思文閣）・三〇〇～三〇一頁
12　『性霊集』・『三教指帰　性霊集』（岩波書店）・一八五頁
13　同　一八九頁
14　高橋富雄『徳一と恵日寺』（ふくしま文庫・⑰）七一～七二頁にこの問題が言及されている。
15　同・八六頁
16　空海が徳一に送った書に、「徳一菩薩」と記されている。『高野雑筆集』・弘法大師著作全集・第三巻・四七〇～四七一
17　『三国遺事』・大正蔵四九・九八六・A
18　同　・大正蔵四九・九八六・B
19　久野　健「関東古人彫刻史論」・久野　健『関東彫刻の研究』（学生社刊）・二～二二頁所収

（慶応義塾大学講師）